

豊かなかかわりを通して課題を見つけ、解決にむけて 主体的に活動する体育学習

- 1 これまでの研究のあゆみ
- 2 研究のねらい
- 3 研究の方法
 - (1) めざす生徒像
 - (2) 仮説
 - (3) 具体的なてだて
 - (4) 単元構想
 - (5) 抽出生徒について
- 4 研究の実践と考察
 - (1) 速く走ることに意欲を高めたA
 - (2) ハードルを速く越えたいという思いをもったA
 - (3) 自らの課題を見つけ、ポイントを明確にしていくA
 - (4) 遠くから踏み切っていることを実感するA
 - (5) 成長を実感し、さらに解決方法を見つけるA
- 5 成果と課題
 - (1) 仮説Ⅰについて
 - (2) 仮説Ⅱについて
 - (3) 今後の課題について

研究の概要報告

1 県内の自主的な研究活動のとりくみ状況

「体育でどのような子どもを育てるか、自ら考え、行動する子どもをどう育てるか」を大テーマとして、追究した体育の授業実践が 30 本報告され、次の 2 つの柱で討論が行われた。

(1) わかる・できる・かかわることを大切にした体育の授業づくり」の討論の柱

「子どもたちのわかる・できるを高めるために、他者とのかかわりをどのようにしたのか」

- ① 「何が」わかることが大切なのか
 - ・ 体育の学びが充実するには、どのような効果的な ICT 利活用があるか。
 - ・ 子どもたちがわかるためには、どのような学習課題の設定と場づくりがあるか
- ② 「何が」できることが大切なのか
 - ・ 当該学年の指導内容（主に「知識及び技能（運動）」）は明確になっているか
 - ・ 当該運動領域の指導内容（主に「知識及び技能（運動）」）の系統化ははかられているか
- ③ 「何と（他者・教具・対象）」かかわることが大切なのか
 - ・ 体育授業において「何と」かかわれているか（ICT 利活用との関連も含む）
 - ・ かかわりの中に、「対象（学んでいること）」があるか

課題 1 体育授業では、「何が」わかることが大切なのか、「何が」できることが大切なのか、「何と（他者・対象）」かかわることが大切なのか、その実現にはどのような「体育授業における教員の専門性」が必要なのか。

(2) ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法を工夫した体育の授業づくり

「課題解決にむけて試行錯誤を繰り返しながら、積極的に運動にとりくみ続けるための、適切な課題や教材の設定と指導方法の工夫」

- ④ 「ねばり強く学ぶこと」になる適切な課題をどのように設定するのか
- ⑤ 「ねばり強く学ぶこと」のめざす学習状況とそのため教材をどのように設定するのか

課題 2 「ねばり強く学ぶこと」にむけての適切な課題と教材をどのように設定するか。

2 今後の県教研で論じられた主要な課題

「わかる・できる・かかわる体育の授業実践」と「ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法」の 2 つの柱での討論から、主要な課題は次の 2 点に整理できる。

- (1) 「わかる・できる・かかわる」を深める学習内容の明確化と系統化
- (2) 「ねばり強く学ぶこと」の具体的な学習状況と課題・教材の設定と配列

（鈴木一成・深澤雅基）

報告書のできるまで

第73次教育研究愛知県集会「保健・体育（体育）」分科会では、昨年度までの成果と課題をふまえ、1年間の実践が各単組・支部で集約され、高められて、ここに集結された。

この報告書は、基礎技能の習得と、課題解決にむけて仲間と協力しながら主体的にとりくもうとする中学校第1学年の陸上競技「ハードル走」で実践した内容をまとめたものである。

助言者	鈴木 一成（愛知教育大学）	深澤 雅基（名古屋・栄小）
教育課程研究員	大西 純平（尾北・扶桑中）	糟谷 正幸（西尾・平坂中）
	鈴森 健治（名古屋・東志賀小）	道脇 大斗（知多・大府北中）
	松本 良太（岡崎・竜南中）	弓谷 孝司（名古屋・伊勝小）

1 これまでの研究のあゆみ

蒲郡市の子どもたちは、運動をすることが得意な子と苦手な子の二極化がみられる。蒲郡市体育部会では、自分なりの課題をもち、解決していく中で、「できた」という喜びを味わい、運動が好きな子を増やしていきたいと考え、実践を積み重ねてきた。

私たちが考える「豊かなかかわり」とは、「ひと（自分・友だち・教員）」「もの（グラウンド・コート・器具・用具）」「こと（ルール・めあて）」とのかかわりである。生徒たちが豊かなかかわりの中で、「自ら解決したい」と思う課題を見つけ、子どもたちが主体的に考え、活動する体育学習をめざし研究をすすめてきた。

2 研究のねらい

本学級の生徒たち（男子18人、女子17人、合計35人）は、マット運動にとりくんだ際、新しい技にすすんで挑戦する姿が多くみられた。また、基本的な技の習得を中心に学習したいという生徒もみられ、それぞれが自分の選んだ技の習得や精度を高めることにとりくんだ。その過程で、できるようになりたいという思いはあるが、自己の課題解決にむけて何をすればよいか迷ってしまう生徒が多くいることがわかった。年度当初に行った体育学習に関するアンケートでは、「運動やスポーツがあまり好きではない、または嫌い」と答えた生徒が理由にあげたのは、「走ったり、体を動かしたりすることが苦手」「走るのが遅いし、体力もないから」というものが主だった。そこで、リズムカルに走り、なめらかなハードリングをすることで、走る楽しさや気持ちよさを感じることが出来るハードル走を教材として取り上げることにした。仲間とともに試行錯誤をくり返すことで、自己の課題を解決し、できる喜びを感じたり、ハードル走の面白さを味わったりしてほしいと願った。

3 研究の方法

(1) めざす生徒像

タイムをあげたい、もっと速く走りたいという個の目標達成にむけ、課題をもって主体的に学び続けることができる生徒。

(2) 仮説

本研究におけるめざす生徒像に迫るために、以下に示す仮説を立てた。

ハードル走をリレー形式にする教材やルールを工夫して、「自分にもできそう」「もっと速く走りたい」という思いを引き出し、考えや動きの見える化を活用した単元を構想すれば、自らの課題を解決しようと主体的に学びにとりくむであろう。

(3) 具体的なたて

ア 走力差があっても対等に戦える1台ハードル競走との出会い

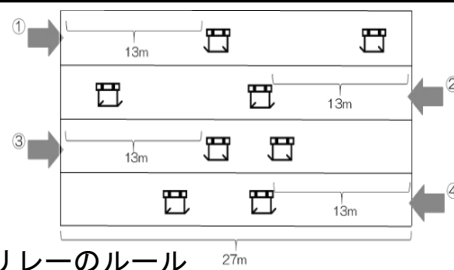
単元のはじめには、個々のタイムから走る距離を算出し、同時にゴールする競走を行う。次に、ハードルを1台置いた状態で、挑戦してみないと勝敗のわからない勝負をくり返すことで、競走の楽しさに気づき、ハードル走に夢中になっていくと考える。

イ シャトルハードルリレーの教材化

競争意識を刺激して学習意欲を高めるために、リレー形式で行うハードル走を取り上げる。そして、自分事として互いに高め合おうとする活動を通して、学びを深めていくことを期待する。

【シャトルハードルリレーのルール】

- ・チームは、1チーム3～4人
- ・ハードルは一番低い高さ（60cm）に設定
- ・コース上に置く台数は2台。コースは27m
- ・1台めの位置は固定。スタートから13m
- ・2台めを置く位置（インターバル）は自由に設定



資料1：シャトルハードルリレーのルール

ウ 思考が見える化する「#（ハッシュタグ）ポイント発見！」の活用

毎回授業の終わりに、リズムカルに走ることやなめらかにハードルを走り越すためのキーワードとなる言葉に#（ハッシュタグ）をつけて、短い言葉でふり返りをさせる。考えたことや仲間からのアドバイスを言葉にすることで、自らの課題を見つけていく姿を期待する。

エ 動きが見える化する「my form」の活用

タイムだけでなく、写真や動画で自分の動きを記録する。動きの一部を静止して確認したり、スローで再生して動きを見たりするなど、課題の解決にむけて活用ができる。また、リズムカルに走り、なめらかにハードルを走り越すことができているかをチームの仲間とともに確認し合うことで、自分の成長を実感しながら課題解決への意欲を継続させていくと考える。

オ 個人のタイムをグラフ化する「my time」の活用

チームで練習をしていくなかで、個人のタイムを計り合う。タイムをグラフ化し、変化が見える形にして蓄積していく。変化がわかりやすい形で自らの課題解決の方法の有効性を実感できるようにすると同時に、さらなる解決方法の獲得へとつながることを期待する。

（4）単元構想（全10時間）

学習活動	□てだて ○留意点
<p>トップスピードで競走しよう①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同じ相手でも勝ったり、負けたりしたよ。 ・次は、もっと勝ちたい。 	<p>□ハードルの越え方の工夫で勝敗が決まるように、タイム差を距離差に換算した競走を行う。</p> <p>○ハードルに対する恐怖心が先行しないように、バーが開くものも選択して使えるように用意をする。</p> <p>□技能のポイントに関する気づきを全体で共有できるように、動きから考えたことやポイントになった言葉に#をつけてキーワード化させる。</p> <p>□グループ内では課題解決の方法が見つからないグループや個人にとって、</p>
<p>一台ハードル競走をしよう②③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もっと速く走るためには、どうすればいいかな。 ・なるべく遠くから低く越えて、減速しないようにしたい。 	
<p>蒲中シャトルハードルリレーで対決しよう④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1台めと2台めの間でかなりスピードダウンしたよ。 ・1台で競走したときに見つけたポイントがいかせそう。 	
<p>チームで合計タイムをあげよう⑤</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2台めを越えたあとでバランスがくずれてしまうよ。 ・他のチームはどんなポイントで練習しているのかな。 	
<p>ポイントを交流！仲間の発見をお試しタイム⑥</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インターバルの長さが短いことが問題だとわかったよ。 ・抜き足はひざを曲げて横にしてみよう。 	
<p>チームで合計タイムをあげよう⑦⑧</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インターバルは3歩にして、もっと遠くから踏み切ろう。 ・同じ足で踏み切って走ったら減速しなかったよ。 	

チームタイムと個人タイムの記録会をしよう⑨

- ・全員の記録が伸びたから、クラスで1番になれそうだ。

Gamarimpicで優勝しよう⑩

- ・スピードを維持して気持ちよく走り切れてうれしかった。
- ・今までで一番低く、速くまたぎ越すことができたと思う。

練習方法を考え直したり、解決の糸口になったりするように、ポイントを試す時間を設ける。

- 自分やチームの成長に気付くことができるように記録会を行い、蓄積してきた記録の分析をする。

(5) 抽出生徒について

Aは、年度当初に行った体育学習に関するアンケートでは、運動やスポーツは「どちらかといえば好き」を選択し、その理由としては、「運動が好きだからです。でも走るのが苦手です。ほかの人よりも遅いからです。」と答えた。そして心配なこととして、「みんなよりも走るのが遅いし、運動が少し下手だから、迷惑をかけないか心配です。」と記述した。このことから、Aは、体を動かすこと自体は好きだが、走ることへの苦手意識が強く、前向きな気持ちになり切れないことがわかった。

そこで、この単元を通して、Aには、自分の走りや動きに自信をもち、「自分にもできる」という気持ちを高めてほしい。そして、自分に合った課題を見つけ、解決にむけて仲間とともに考え、主体的に運動にとりくむことで、できる喜びや達成感を味わい、自分の走りに自信がもてるようになることを期待したい。

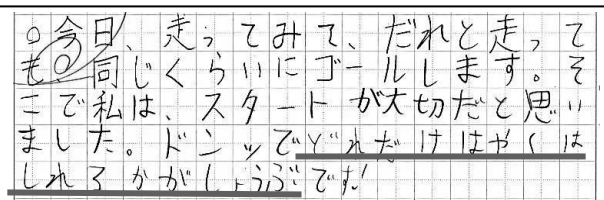
4 研究の実践と考察

(1) 速く走ることに意欲を高めたA

(てだてーア 走力差があっても対等に戦える1台ハードル競走との出会いの検証)

走力差があっても対等に戦えるように、50m走のタイムから3秒で走れる距離を算出し、第1時では、その距離での競走を行った。ゴールは全員同じで、スタートの位置が違う競走である。Aのふり返しには、「どれだけはやくはしれるかがしょうぶ」[資料2]という記述があり、走ることへの意欲を高めていることがうかがえた。

第2時からは、コース上であれば、スタートからゴールまでのどの位置にハードルを置いてもよいというルールで1台ハードル競走を開始した。Aは、はじめは何度かハー



今日、走ってみて、だれと走っても同じくらいにゴールします。そこで私は、スタートが大切だと思いました。ドンッでやればはやくはしれるかがしょうぶです!

資料2：Aのふり返し（第1時）

ドルの前で止まってしまう、越えることができなかった。それでも、繰り返し挑戦をするうちに、ハードルの前で少し立ち止まることはあったが、越えられるようになっていった[資料3]。ふり返しには、「とびこえる前にたちどまって高くとんでしまった」[次頁資料4]と記述し、勝負にこだわって競走するうちに、減速の原因に気付いたことがわかる。そして、ハードルを越えるときの自分の動きのイメージを「なめらかなお山」と表現し、ハードルの越え方について考え始めた。

さらに、続けて1台ハードル競走を行った第3時のふり返しに



資料3：一台ハードルを越えるA（第2時）

は、「2歩とおくからとび、1・2・3・4とリズムをきめて」[次頁資料5]と、夢中になって何度も競走にとりくんでいくうちに、タイムを上げるための自分なりの解決策を見出して、実践していったことがわかる。その結果、Aは、「とぶばしょにきたら、しぜんとあしがあがって、少しスムーズにとべました」と、学びの成果を感じていることが読み取れる。

今日はハードルで「はやくとび」がコンカワりました。
それは、(物場合)ハードルから(2歩)とおくからとび、
1・2・3・4とリズムをきめてとびです。そうすると、
とびはいいきたら、しぜんとあしがあがって「スムーズ」
にとべました。

資料5：Aのふり返り（第3時）

飛んでとびこえるハードルは、とびこえる前にたどって
高くとびましたので、次はハードルのたどし「リズム」
がなめらかなお山をつくるようにしてはろうと思
います。 ↑ わかりやすいイメージ!!

資料4：Aのふり返り（第2時）

(2) ハードルを速く越えたいという思いをもったA

(てだてーイ シャトルハードルリレーの教材化の検証)

第4時では、ハードルの台数を2台で行う「蒲中シャトルハードルリレー」のルールを

紹介し、チームにわかれて早速お試しのレースを行った。チームは、個々のタイムの合計でチーム間にあまり差異がなくなるように、授業者がチーム編成を行った。

Aは、お試しのレース後、これから調べたいことを「歩はばの調節」と「ハードルをどこにおくか」[資料6青線]であるとまとめ、2台のハードルを越えるための課題を明確にし、自ら解決したい課題を見つけることができた。そして、「はやさがすごくかわる」「はやくとべるようにしたい」[資料6赤線]という言葉から、もっと速く走りたいという思いをもって学びに向かう姿につながったことがわかる。

今日は初めての2個ハードルとチーム単体でした。今回は、
1人1人言いたいことが二つできました。一つ目は、1個目から2個
目の歩はばの調節です。ここがあたりがないかでははやくと
くかわると思います。二つ目は、ハードルをどこにおくか
なるべく、効率よくとべるようにしたいです。

資料6：Aのふり返り（第4時）

(3) 自らの課題を見つけ、ポイントを明確にしていくA

(てだてーウ 思考が見える化する「# (ハッシュタグ) ポイント発見！」の活用)の検証)

第2時で1台ハードル競走にとりくんだときから、「#ポイント発見！」によるふり返りを始めた。Aは、第3時で「#とぶばしょ」とポイントをあげ、踏み切る位置（跳ぶ場所）を自分の課題として追究を続けた。その結果、第9時では「#とおくからとび」[資料7赤枠]とまとめた。また、第5時で新たに加わった「#上半身」というポイントは、第7時で「#手を前へ」[資料7青枠]と記すなど、より具体的な動きに視点をおけていることから、思考が深まっていることが読み取れる。

時間	#ポイント発見！	時間	#ポイント発見！
第3時	#ポイント発見! #リズム #ちめらか! #とぶばしょ	第9時	#ポイント発見! #手 #なるべくいきおいをつけて #とおくからとび
第5時	#ポイント発見! ハードル #ゆるがせ #2個の位置 #はばはば #上半身	第7時	#ポイント発見! #あしをまっすぐ #いきおいよくあしをあげる #はばはば #手を前へ

資料7：Aの#ポイント発見！の変容

このように、短い言葉の中にポイントの変化が読み取れる。自分の動きや仲間のアドバイスから考えたことを短い言葉でまとめていくことで、抽象的だった言葉を具体的にしながら自分のものとして獲得していったといえる。

第9時のふり返りでは、「とおくからとぶこと、手をいしきしました」[資料8]とあり、ポイント発見でまとめていったことを課題として設定したことがわかる。設定した課題解決にむけてとりくむうちに「タイムが上がり」、そして「達成できました」という言葉から、自らの課題に合った解決方法を実践していったことがわかる。

今日はなるべくとおくからとぶこと手をいしきしました。始めはまよこになってしまいましたが、いしぎしていきうちにコツをつかみ、自然にできるようになりタイムが上がりました。そしてたいぶとおくからとぶということが達成できました。

資料8：Aのふり返り（第9時）

（4）遠くから踏み切っていることを実感するA

（てだてーエ 動きを見える化する「my form」の活用の検証）

Aは、インターバルの歩数に悩み、それに合わせて踏み切り位置がハードルの近くになってしまうことを課題としていた。生徒Bが動画を静止し、Aと画像[資料9右]を確認すると、「こんなに遠くから踏み切れている」[資料10]と言って自分の成長を実感し、さらに励まされたことで次への意欲を見せた。

第7時の「思ったよりとおくからとべていることがわかりました」[資料11]というふり返りの「思ったより」という言葉からは、動画を見るまでは自分がどの程度遠くから踏み切れているのかわかっておらず、成長を感じることができていなかったと考えられる。動画で「my form」を確認したことが、仲間とともに自分の成長を実感することとなり、さらに次の課題解決へつながる意欲になったといえる。

第2時のA



第7時のA



資料9：Aの踏み切り位置の比較

生徒B：けっこう遠くから踏み切れているよ

A：そうかな。自分だとわからない。

… 画像を確認 …

A：こんなに遠くから踏み切れていること知らなかった。

生徒B：かなり遠くから踏み切れているから自信をもって！

A：もう一回やってみるね。

資料10：授業記録（第7時）

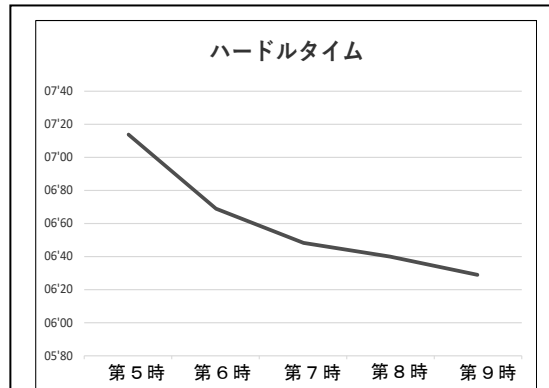
今日は、あしをすばやくあげて、ハードルを跳ぶ練習と歩幅を合わせる練習をしました。生徒Bが協力してくれたので、歩幅、ハードルから3.5歩の位置でとびこり、分かりました。思ったよりとおくからとべることがわかりました。だからこゝろ「布がらす」と「とぶ」と思っながらとまると決めました。

資料11：Aのふり返り（第7時）

(5) 成長を実感し、さらに解決方法を見つけるA

(てだてーオ 個人のタイムをグラフ化する「my time」の活用の検証)

第5時の1回目のチーム練習で、はじめて全員が個人のタイムを協力して計測し合った。その後、第6時から、自分たちのチームで決めたやり方で「my time」を記録した。はじめての計測で7.14秒だったAの「my time」は、毎時間少しずつ変化を続けた。タイムを入力し、グラフ化をすることで、毎時間の変化がわかり、課題解決への意欲につながった [資料12]。



No	第5時	第6時	第7時	第8時	第9時
タイム	07:14	06:69	06:48	06:40	06:29

資料12：Aの「my time」の変化

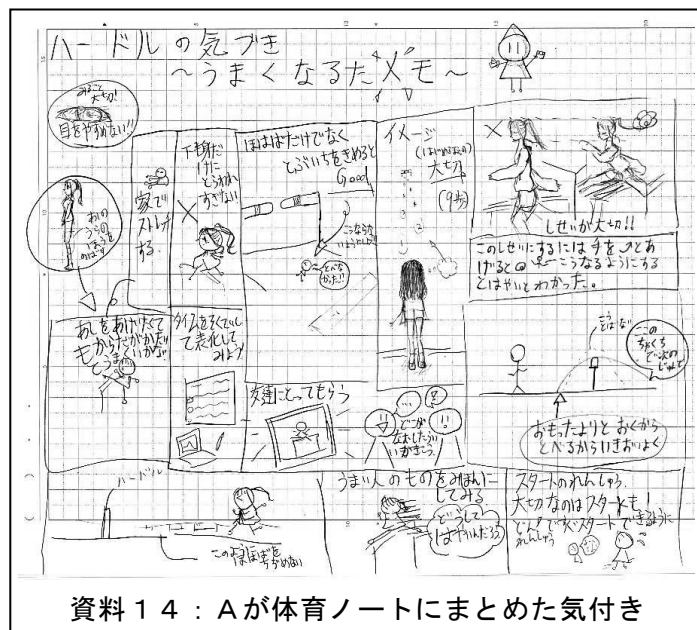
ハードルタイムの変化を確認したAは、第8時の時点で「前よりも少しずつタイムがよくなっている」と自分の成長を実感していた。さらに、「手が前にいけば、とおくからとんでも、とべることが発見」[資料13]という記述からは、動きの発見と合わせて自分のタイムの変化を確認することで、自分なりの解決方法を試して、もっとハードリングを上達させたいという思いを強めていることが読み取れる。自らの課題解決の方法の有効性を実感することで、さらに自分の動きを変化させようとする意欲につながったと考えられる。

今日は足を意識して練習をしました。ハードルの前で足をあげた時、手が前にいけば、とおくからとんでも、とべることが発見することができました。前よりも少しずつタイムがよくなっているので、もっと上達できるよ、がんばります。

資料13：Aのふり返り（第8時）

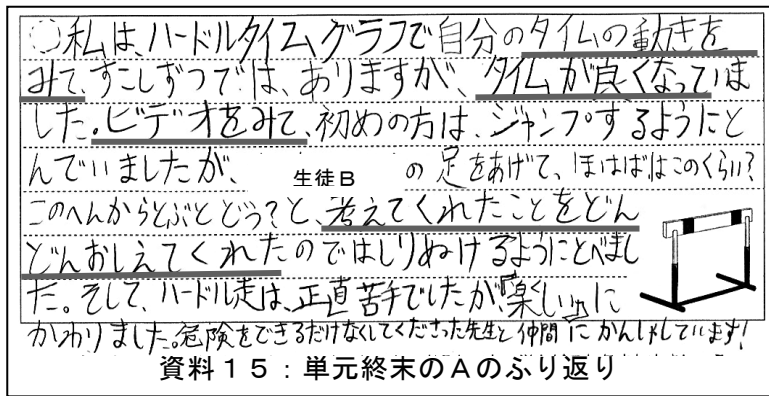
5 成果と課題

Aは、走ることに苦手意識をもち、自分の走りが人に迷惑をかけないかを心配する気持ちがあった。そんなAが、自分からハードルをどのように越えたらよいか考え始めたことは、走力差があっても対等に戦えるよう工夫したルールで競走を行った成果だといえる。また、単元を通して、[資料14]のように、自主的に体育ノートにうまくするためのメモとして、気づきをまとめながら学習をすすめてきた。このようなとりくみの様子から、競走でうまれた「自分にもできそう」という思いが、自分の学習の自信につながったといえる。さらに、その自信が、「もっと速く走れるようになりたい」という思いを支え、主体的に学びにとりくみ続けたといえる。



資料14：Aが体育ノートにまとめた気づき

次に、Aは、自分なりの言葉でポイントをまとめ続けた。自分の動きや仲間のアドバイスから考え、新しく発見したポイントについて、どうしたら解決できるかを考えることができたのは、短い言葉でポイントを明確にし、自分事として考えてきた成果だといえる。また、Aは、単元の終末に、[資料15]のように学習をふり返った。「自分のタイムの動きをみて」「タイムがよくなって」という言葉から、タイムの変化から自分の成長を客観的に実感していることがわかる。さら



に、「ビデオをみて」「考えてくれたことをどんどんおしえてくれた」という言葉からは、はじめの頃の動画を見返し、自分の成長を感じるとともに、成長を支えてくれたのは仲間であることを実感している。これらのことは、タイムのグラフ化や動画の撮影によって動きを見える化したことが、仲間とともに自らの課題を解決したいという意欲を継続させてきた成果だといえる。教材やルール工夫によって、自分なりの解決方法を何度も試すことができたことが、課題の解決にむけたAの主体的な学びにつながったといえる。

(3) 今後の課題について

本実践では、走ることを苦手としている生徒が「自分にもできそう」という思いを継続させながらとりくめる教材の開発をすることができた。陸上運動だけでなく、そのほかの運動領域でも、運動を苦手としている生徒の意欲の継続や技術の向上に効果的な支援ができるよう、教材の開発やさらなるICTの活用方法を探っていきたい。